本館玄関を出る人々 ／ 1955年 ／ 写真原板所蔵・日本写真保存センター

150

新しい一歩を、
あなたと。

東京国立博物館は、2022年3月、創立150周年を迎えます。

1872年に開催された博覧会が、私たちのはじまりです。

いつの時代も、私たちの使命は、文化財を大切に守り、次の世代へ伝えること。

先人から受け継いだ文化財は、人類一人ひとりの宝物です。

2022年、私たちは、過去と未来の懸け橋として、

また広く社会をつなぐプラットフォームとして、新しい一歩を踏み出します。

150年の歴史を振り返りながら、

文化財の魅力や、博物館の楽しさを、より多くの方と分かち合いたい。

そんな思いから生まれた、数々の企画をお届けしていきます。

すべては、かけがえのない宝物を、ともに守り伝えてゆくために。

私たちの、そして文化財の未来は、ここからまた、あなたと一緒にはじまります。

1872–2022

東京国立博物館
創立150年記念 ロゴマーク

コンセプト

このロゴマークは、東京国立博物館の所蔵品や、本館、表慶館の建築装飾に使われている「唐草文」をモチーフにしています。

「唐草文」は、植物の茎や蔓が連なり、広がる文様で、人類が生み出した代表的な意匠の一つです。地域や時代を超えて、各地の文化の影響を受けながら多様な形に変化し、広く用いられてきました。また、日本においては、「繁栄・長寿」の吉祥文様としても知られます。

シルクロードを経て、日本へ伝わった「唐草文」という世界中に存在する文様を用いることで、世界とのつながりを象徴するとともに、東京国立博物館をプラットフォームにして、多種多様な人々に文化を広げていく姿勢を表現しています。

カラーバリエーション

デザイン

東京国立博物館学芸企画部企画課デザイン室　荻堂正博研究員

東京国立博物館の歴史

古今珎物集覧　一曜斎国輝筆　明治５年（1872）
明治５年（1872）の湯島聖堂博覧会を描いた錦絵。
ここから東京国立博物館150年の歩みが始まった

内山下町に移転。山下門内博物館と呼ばれた

上野博物館遠景之図　J. コンドル筆

旧本館の展示室。キリンなどの剥製も展示していた

1872

旧湯島聖堂の大成殿で開催した博覧会を機に「文部省博物館」として発足

1873

ウィーン万博参加のための博覧会事務局に博物館・書籍館が合併し、内山下町（現千代田区内幸町）に移転

1875

内務省所管となる。翌年、陳列区分は、天産、農業山林、工芸、芸術、史伝、教育、法教、陸海軍部の８部門となる

1881

上野公園内にイギリス人建築家コンドル設計の建物（旧本館）が竣工し、１階が第２回内国勧業博覧会として利用された

1882

旧本館開館をもって上野の現在地に移転

1889

宮内省所管の「帝国博物館」となる

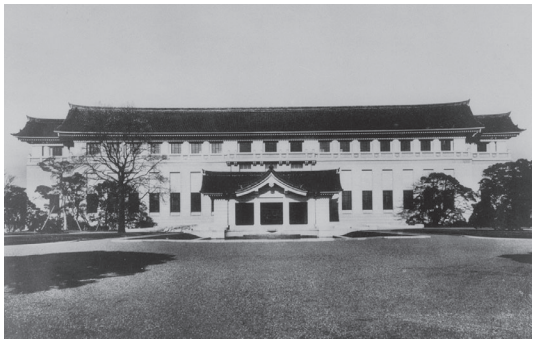
1900

「東京帝室博物館」と改称

1909

大正天皇の御成婚を記念して建てられた表慶館が開館

関東大震災で損壊した旧本館


完成当時の本館

食糧難から、館の所有地を農地として開放

法隆寺宝物館（旧館）

1965年　ツタンカーメン展の行列

1923

関東大震災発生。旧本館損壊

1938

現在の本館が開館。陳列区分は、絵画、書跡、彫刻、金工、陶磁、漆工、染織、考古に変更

1941

戦争被害を避けるため美術品の疎開が始まる。12月、太平洋戦争開戦

1945

空襲激化のため、3月、観覧を停止。終戦後翌年3月観覧を再開

1947

宮内省より文部省に移管。「国立博物館」と改称

1952

「東京国立博物館」と改称

1964

法隆寺宝物館（旧館）が収蔵庫兼展示施設として開館（毎週木曜日、晴天日のみ開館）

1968

文化庁の所管となる。東洋館が開館

1984

資料館が開館

平成館

法隆寺宝物館

公式キャラクター「トーハクくん」と「ユリノキちゃん」
2012 年、開館 140 周年を記念して誕生

本館北側庭園の全面リニューアル工事を実施。
2021 年 4 月 1 日から全面開放

1999

法隆寺宝物館（新館）開館、続いて今上陛下の御成婚を記念して平成館が開館

2001

「独立行政法人国立博物館 東京国立博物館」となる

2007

「独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館」となる

2010

平常展を「総合文化展」へ改称

2011

3月11日、東日本大震災発生。震災の影響で臨時休館を行い、3月29日から順次開館

2013

1月2日、東洋館リニューアルオープン

2015

1月2日、黒田記念館リニューアルオープン
10月14日、平成館考古展示室リニューアルオープン

2020

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2月27日から臨時休館。6月2日から順次開館。翌年も4月25日から5月31日まで臨時休館

2022

創立150周年を迎える

150年史編纂事業

東京国立博物館は、創立 150 周年を迎えるにあたり、『東京国立博物館百五十年史』（以下『百五十年史』と略す）を刊行します。東京国立博物館の150年を新しい視点から捉え直して整理し、学術資料としてだけでなく、一般の方々にもわかりやすい『百五十年史』をめざします。

1973 年に東京国立博物館は『東京国立博物館百年史』を刊行しました。今回刊行する『百五十年史』は、それ以降 50 年の概要・あゆみを記述するだけでなく、改めて国際社会における近代日本文化の発展に注目し、世界的視野を持って日本文化の位置付けを見直すものです。その中で東京国立博物館が果たした役割や、さまざまな事業がどのような意義をもっているか、そして社会に及ぼした影響などを具体的に示していきます。さらに東京国立博物館が担う役割として、これから迎える新しい博物館の時代に対応するため、将来の日本の博物館全体に向けて今後の指針を示すような『百五十年史』とします。

『東京国立博物館百五十年史』

主な内容

（本　編）

序　章	創設より国立博物館発足までのあゆみ	（1871 ～ 1949年）
第 1 章	新たな「国立博物館」の誕生	（1950 ～ 1973年）
第 2 章	博物館の機能の強化	（1974 ～ 1981年）
第 3 章	情報化社会と博物館	（1982 ～ 1992年）
第 4 章	平成館建設と事業の拡大	（1993 ～ 2000年）
第 5 章	より親しみやすい博物館への転換	（2001 ～ 2006年）
第 6 章	国立文化財機構における新展開	（2007 ～ 2015年）
第 7 章	魅力ある博物館へ	（2016 ～ 2021年）

（資料編）

組織変遷、施設建物変遷、歴代役員変遷表、展覧会一覧表、
入館者数一覧表、観覧料変遷表、など。

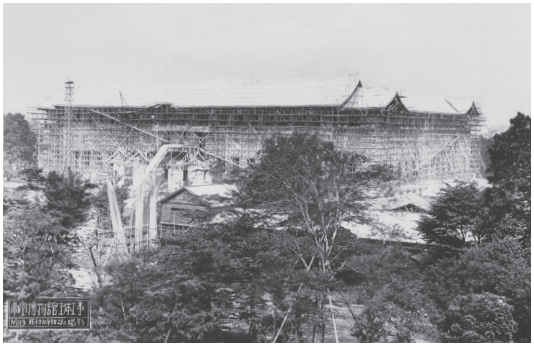
判型・予定ページ数

本　編　B5 判（257×182mm），828 ページ（カラー口絵 4 ページ）
資料編　B5 判（257×182mm），712 ページ（カラー口絵 8 ページ）

刊行予定日

2022 年 8 月 31 日

旧本館



1935年頃、建設中の本館

1974年　モナ・リザ展の行列

総合文化展
東京国立博物館創立150年記念の特集

2022年度には特別展だけでなく、総合文化展の中でも創立150年を記念したさまざまな特集を予定しています。当館における収集、保存、研究、展示という博物館の根幹となる活動の歴史、そして未来をご覧いただける展示です。

＊以下に示した会期および会場は現在調整中です。ご紹介いただく際は、広報事務局にご確認ください。
＊画像の作品はすべて東京国立博物館蔵です。

未来の国宝―東京国立博物館　書画の逸品―

◎本館2室　通年企画

本館2室・国宝室では通常、国が指定した絵画・書跡分野の国宝を展示しています。この展示室には150年後、もしくはその先の未来、どのような作品が展示されているのでしょうか。東京国立博物館150年の歴史の中で収集された作品のなかには、国指定の国宝や重要文化財となっていなくとも素晴らしい作品が数多く収蔵されています。

この展示室では、東京国立博物館の研究員が選び抜いた一押しの作品を「未来の国宝」と銘打って、年間を通じてご紹介します。

見返り美人図　菱川師宣筆
江戸時代・17世紀

未来の国宝―東京国立博物館　彫刻、工芸、考古の逸品―

◎本館11室・14室　10月～11月

本館11室及び14室では、彫刻、工芸、考古分野の館蔵品の中から、東京国立博物館の研究員が選び抜いた一押しの作品を、特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」の会期中にご紹介します。

重要文化財　白瑠璃埦　ササン朝ペルシア　大阪府羽曳野市
伝安閑陵古墳出土　古墳時代・6世紀　クラブ関西寄贈

東南アジアのやきもの―収集と研究の軌跡―

◎本館14室ほか　3月下旬～5月中旬

東京国立博物館が収蔵する東南アジア陶磁のうち、明治から大正、昭和のはじめにかけて収蔵された作品に注目し、近代日本における陶磁器研究の歴史をたどりながら、その稀少な価値と造形的魅力を展観します。とくに、吉田作弥、岡野繋蔵、横河民輔など収蔵にかかわった人物にも光をあて、作品と結びつけて紹介します。また、なかなか展示の機会が少ないベンチャロン（タイ向けの中国輸出陶磁）もこの機会にまとめて出品します。

重要美術品　紅安南唐草文茶碗　ベトナム　16 世紀

東京国立博物館の近世仏画―伝統と変奏―

◎本館特別1室・特別2室　4月上旬～5月中旬

当館が所蔵する近世の仏画は、狩野一信筆「五百羅漢像」のほかにも木村徳応や神田宗庭といった、江戸時代を代表する絵仏師の作品もあります。これらは、平安・鎌倉時代に制作された仏画と違い、彩色が鮮やかに残っています。創立150年を記念して普段なかなか展示する機会がない、近世仏画をまとめてご覧いただきます。

当麻曼荼羅図（部分）　神田宗庭隆信筆
江戸時代・天保 7 年 (1836)　喜多川儀久氏寄贈

東京国立博物館の模写・模造
―草創期の展示と研究―

◎本館特別1室・特別2室　10月上旬～ 12月末

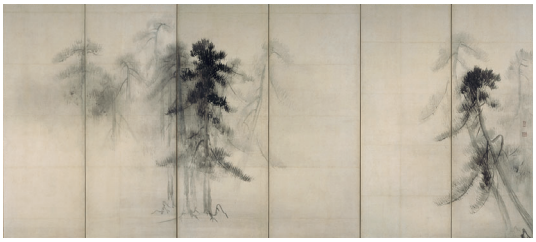
草創期の東京国立博物館では、展示品の足りない分野を補うため、また研究のため、多くの模写・模造が作られました。館内で専属の職員を雇用したほか、外部の専門家に制作を依頼し、さらに積極的に購入を行っています。帝室博物館時代を中心に作られた模写・模造作品を一堂に展観し、あわせて草創期の博物館の展示のあり方もご紹介します。

片輪車螺鈿手箱（模造）小川松民作　明治13年 (1880)
原品：鎌倉時代・13 世紀

戦後初のコレクション　国宝「松林図屏風」

◎本館7室　2023年1月

東京国立博物館が1947年に皇室から国に移管され、国立博物館として国民の博物館となったときに、戦後初の購入作品の一つとなったのが「松林図屏風」です。1952年11月22日に国宝に指定されてから今日まで、正しく国民の「国宝」として広く知られるこの作品を、1点展示いたします。



国宝　松林図屏風（部分）　長谷川等伯筆
安土桃山時代・16 世紀

時代を語る洋画たち
―東京国立博物館の隠れた洋画コレクション―

◎平成館企画展示室　6月～7月

当館は、現在では古美術の殿堂というイメージをお持ちの方が多いと思いますが、洋画の収蔵品もあり、それらの多くは、明治、大正、昭和初期において、制作とほぼ同時期に収蔵された「現代美術」であったものです。中には海外作家の作品もあり、収蔵背景には当時の美術界、社会状況の動きとの密接なつながりがありました。それらは博物館が時代の動きに積極的に関わって活動してきたことを物語る重要な証人といえます。

本特集ではそうした洋画コレクションの中から、現在の展示体系の中では展示が難しい作品に絞って展示し、収蔵当時の時代背景や博物館活動におけるその意義について紹介します。

画室　猪熊弦一郎筆　昭和8年（1933）

つたえる、つなぐ―博物館広報のあゆみ―

◎平成館企画展示室　9月末～11月初

東京国立博物館がこれまで作成してきた広報用制作物の中から、展覧会のポスターや案内パンフレット、 博物館ニュースなどをご覧いただきます。時代とともに変わるデザインや表現の変遷、あるいは情報発信のかたちなど当館の広報活動のあゆみを通して、多くの人びとと博物館とのコミュニケーション活動の歴史を概観し、博物館の歴史の一面をご紹介します。

あの日みたあの展覧会、あの時訪れた博物館を当時のあなたと重ねていただき、ご自身のストーリーに思いを馳せていただければと思います。

國立 The NATIONAL MUSEUM NEWS 博物館ニュース

國民と博物館

「国立博物館ニュース」第1号　昭和22年（1947）

高円宮殿下二十年式年祭記念
根付　高円宮コレクション

◎平成館企画展示室　11月中旬～12月末

高円宮コレクションは、憲仁親王殿下が久子妃殿下とのご婚約以来約18年にわたって収集された、現代根付を中心とするコレクションです。殿下の収集品のうち、260件が2015年度までに当館に寄贈されており、常時50個の現代根付を「高円宮コレクション室」にて展示公開しています。

2022年は、殿下の二十年式年祭にあたります。これを記念し、現代根付の保存と公開を企図された殿下のご遺志を顕彰するとともに、新たな寄贈品を含めた「高円宮コレクション」計500件の全てをご覧いただきます。

竹に雨蛙　小林仙歩作　昭和61年（1986）

古代染織の保存と修理―50年にわたる取り組み―

◎法隆寺宝物館第6室　10月中旬～11月中旬

2022年は1972年に法隆寺献納宝物の染織品修理がはじまって50年という節目の年です。これを記念して、過去の修理と現在の取り組みをご紹介する特集展示を行います。展示では法隆寺における江戸時代の染織品保存にはじまり、博物館において1972年以降本格化した修理事業の変遷をたどります。古代の貴重な染織品を守るために進化し続ける東京国立博物館の取り組みをご覧ください。

羅道場幡の修理作業　2021年

東京国立博物館の調査研究活動

東京国立博物館の主要な事業活動は、文化財の収集、保存、公開、教育普及などです。

それらの活動を展開するために、文化財にかかわる幅広い調査研究活動をたゆみなく積み重ねてきました。とりわけ収蔵品の調査研究を中心に専門の研究員が、国内外の研究者や専門家とも協力、連携しながら毎年、計画的に文化財の調査研究を推進してきました。

その成果は展示、公開され、あるいは研究書籍としてまとめられてきました。

我が国最大級のコレクションを擁する東京国立博物館は、専門の研究員を多数配置して、日本における研究拠点ともなっています。

そして近年は、調査研究にかかわるその手法や技術的革新もなされ、高精細画像、映像の取得、利活用も活発になってきました。その一つが2020年度からはじめたNHKとの共同研究「みんなの8K文化財」です。東京国立博物館とNHKは8K技術を使った共同研究「みんなの8K文化財」プロジェクトを実施中です。現在行われている文化財調査と、その一部をご披露する番組についてご紹介します。

東京国立博物館 ×NHK　共同研究
8K文化財プロジェクト

新型コロナウイルスの感染拡大のなか、世界中の美術館、博物館は新たな美術鑑賞の手法を模索しています。このような状況下で８K文化財をさまざまなデジタルツールと組み合わせることで、誰もが文化財を楽しみ「心の豊かさ」につながるよう新時代の美術鑑賞のあり方を探求し、その成果を放送番組やイベントなどで発表します。

８K文化財を用いたこれまでにない文化財の鑑賞方法を提示することで、日本の文化財に興味のなかった多くの方々に、日本文化の面白さや、文化財を鑑賞する楽しさを味わっていただけると思います。

8K文化財遮光器土偶CG画像。内部の画像

8K文化財遮光器土偶CG画像。500倍に巨大化

実績

●研究

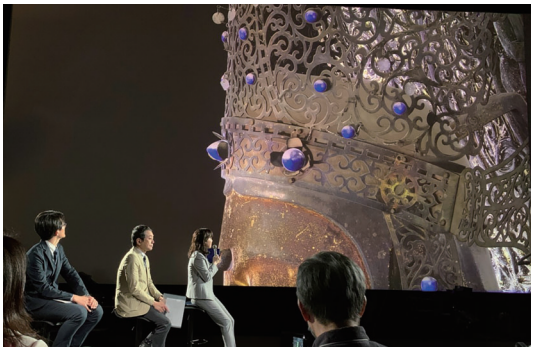
法隆寺の秘仏、救世観音の3DCGを東西２か所（東京、奈良）の８Kシアターで仏教美術の研究者たちが同時調査するデジタル調査会を実施。

●展示

聖徳太子1400年遠忌記念 特別展「聖徳太子と法隆寺」【2021年７月13日（火）～９月５日（日）】の特別企画として「８K文化財　国宝 救世観音・百済観音」を実施。3DCGを8Kモニターなどで東京国立博物館平成館１階ガイダンスルームにて展示。

●国際

フランスで開催されたPiXii Festival【2021年６月21日（月）～ 24日（木）】内でオンラインにて実施された「制作者セッション」に参加。8K文化財のセッションには71人が参加し、PiXiiセッションのうち２番目に多い参加者数を記録。



デジタル調査会

東京国立博物館創立150年記念
特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」

会期：2022年10月18日（火）～12月11日（日）

展覧会趣旨

本展は、東京国立博物館創立150年を記念し、膨大な所蔵品の中から国宝89件すべてを含む名品と諸資料を通して、東京国立博物館の全貌を紹介するものです。展示は2部構成で、約150件（予定）を展示します。

第1部「東京国立博物館の国宝」では、所蔵する国宝89件すべてを展示（会期中展示替えあり）します。これは150年の歴史上初めてのことで、誰も見たことがない、メモリアルイヤーにふさわしい展示が実現します。第2部「東京国立博物館の150年」では、日本の博物館の歴史ともいえる東京国立博物館の150年を3期に分け、関連する作品や資料、再現展示、各時代の映像などを通してわかりやすく紹介します。

日本美術を代表する名品の数々はもちろんのこと、日本近代化の世相を反映した博物館の活動や、文化財保護と活用の取り組みなど、日本で最も長い歴史を誇る最大の博物館、東京国立博物館の150年を多面的に紹介します。東京国立博物館を訪れたことがない方には新発見の場として、親しいリピーターの方には再発見の場として、魅力的な展示構成と展覧会場を創出します。

主な展示作品（第1部）

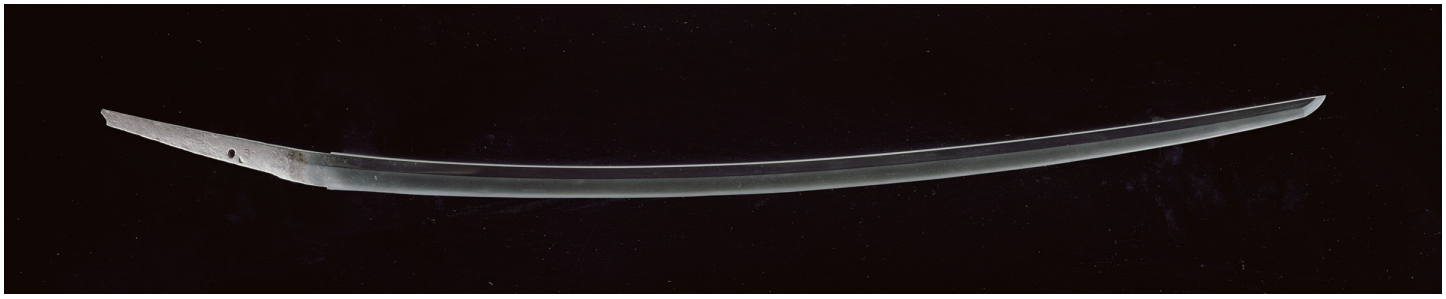
国宝　檜図屏風　狩野永徳筆　安土桃山時代・天正18年（1590）

狩野永徳が描いた障壁画の傑作。檜の巨木の迫力は圧倒的で、生命力に満ちています

※各作品の展示期間についてはすべて未定

国宝　埴輪　挂甲の武人
群馬県太田市飯塚町出土　古墳時代・6 世紀
教科書にも載っている武人埴輪の代表作。
今回が3年にわたる全面修理後の初公開です

国宝　鷹見泉石像　渡辺崋山筆
江戸時代・天保8年(1837)
和洋の絵画技法が融合した江戸肖像画の傑作。
現在の本館が開館した1938年の収蔵作品です



国宝　太刀 銘 三条(名物 三日月宗近) 平安時代・10～12 世紀　渡邊誠一郎氏寄贈
日本刀成立期の刀工三条宗近の代表作。天下五剣の一つで、最も美しいとされます

主な展示作品(第2部)

重要文化財　鷲置物　鈴木長吉作　明治25年 (1892)
シカゴ・コロンブス世界博覧会事務局寄贈
翼を広げた鷲を生き写しにした日本近代金工の最高峰。
1893年のシカゴ万博で高く評価されました

古今珎物集覧　一曜斎国輝筆　明治5年 (1872)
1872年の湯島聖堂博覧会を描いた錦絵。
ここから東京国立博物館150年の歩みが始まりました

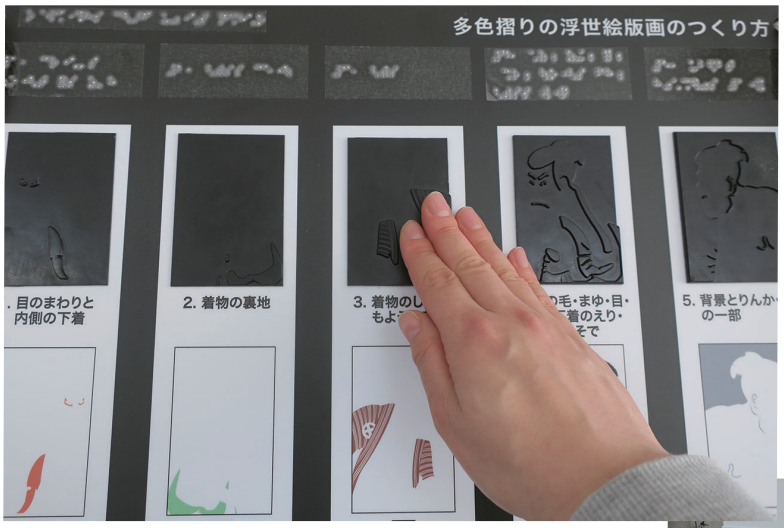
※各作品の展示期間についてはすべて未定

教育普及活動

東京国立博物館では、多種多様なコレクションと、調査研究、展示公開、保存修復などの博物館活動に対し、興味をいだき、親しみを感じ、理解を深めてもらえるよう、教育普及事業を行ってきました。さらに次の時代を見据え、誰もが『自分たちの博物館』と思える、より開かれた場となることを目指して、150周年では次のような新しい取り組みを進めていきます。

さまざまな来館者のために

150周年を機に、さまざまな来館者が安心して見学できる取り組みを、これまで以上に考えていきます。「センサリーマップ」は、光や音、臭い、人込みなどに敏感な方のために、館内で安心して過ごせる場所を表示し、ウェブなどで公開します。静かな館内で落ち着いて過ごしたい方どなたでもご利用いただけます。また、より多角的に鑑賞を行うため、「触察ツール」を展示室で公開します。視覚に障がいのある無しにかかわらず、触れることで作品に興味がわき、新たな鑑賞体験が広がるでしょう。さらに、将来学芸員を目指す子ども達を対象に「トーハクジュニア学芸員」(仮)というプログラムを行います。博物館の仕事の一端にふれ、自ら情報発信する体験を通し、博物館について身近に感じることができます。



トーハク劇場へようこそ！
～博物館の誕生編～

2012年より実施している演劇形式のガイドツアー「トーハク劇場へようこそ！」の150周年記念特別編。博物館の創立経緯にスポットをあて、「博物館」という場所に込められた人びとの夢や想いにせまります。参加者の子どもたちと、初代館長町田久成の顕彰碑や森鴎外総長室跡等、博物館構内にのこる歴史の足跡をめぐる中で、博物館の創立や運営に奔走した歴史上の人物に出会います。彼らとの対話から、明治時代から令和にいたる150年間の歴史を知るだけでなく、未来の博物館についてもともに考えるツアーです。

子どもたちの描く「未来に伝えたい宝物」記念チケット

トーハクは、未来を担う子どもたちにも日本の文化を伝え、トーハクと一緒に歩んでもらいたい、と願っています。この企画は高校生以下の子どもたちを対象とした参加型イベント。子どもたちは、未来に伝えたいトーハクの所蔵品を一つ選び、そのイラストを描きます。館内のポストあるいは郵送で集めた応募作品から選んだ150点のイラストをデザインしたノベルティチケットを、2022年11月8日（予定）から来館者に限定配布します。子どもたちにとってはトーハクの所蔵品を通し文化に触れ、親しむ機会であり、おとなにとっては子どもたちの目を通してトーハクの文化財の魅力を再発見する、またとないチャンスになるはずです。

月イチ！　トーハクキッズデー

「子どもが騒いだりすると迷惑なのではと遠慮してしまって……」「子どもには博物館は難しくて……」そんな思いをもつご家族に、博物館のおもしろさを知っていただくためのとくべつな一日、トーハクキッズデー。小さなお子さん連れにも親しみやすいワークショップやギャラリートーク、コンサートなどのイベント、飲食や休憩のできるキッズスペースなどをご用意し、2016年からみなさまをお迎えしてきました。

これまでは年に1回（一日）の開催でしたが、150周年記念となる2022年は、「月イチ！トーハクキッズデー」と題して毎月行います。心おきなくお子さんと博物館を楽しんでもらえる一日が、今月、来月、そして次の月も！

コラボレーショングッズの制作

創立150周年を契機に、企業との協働によって、文化財を活用した魅力ある商品開発を展開し、より多くの方に東京国立博物館を紹介する機会とします。

三越伊勢丹

2016年から展開しているコラボレーション事業では、これまで中元・歳暮をはじめ、多くの商品を販売してきました。今回、2022年に限定し、「東京国立博物館の至宝」と題して、創立150年記念に相応しい、当館の名品の数々をあしらった商品をお届けします。コラボレーショングッズは、2022年中元・歳暮の販売を予定しています。

BE@RBRICK

メディコム・トイが製造するクマ型ブロックタイプフィギュアBE@RBRICKとのコラボレーションを実施します。BE@RBRICKにあしらわれるのは、12万件の所蔵品の中からどの作品でしょうか。

ほぼ日手帳

株式会社ほぼ日（代表：糸井重里）が制作する「ほぼ日手帳」とのコラボレーションを実施します。所蔵品をモチーフにした手帳カバーや週間手帳など、展示の予定や感想を書き留めたくなるようなアイテムを企画しています。